

日本學研究叢書 28



近代日本の中国学
廖欽彬、高木智見 編

近代以降，日本知識體系或世界觀的轉換過程中，日本傳統的漢學以何種方式被塑造並改變其面貌？透過回應前述提問，本書旨在說明，懷有此問題意識者，不應僅限於日本文化圈、甚至單一文化圈的人，以求從多元角度加以檢視與反思此跨文化研究之論述。本書論文的執筆者，多以身為日本文化圈之外的看視者，探究近代日本漢學等相關議題。他們從其自身文化的觀點出發，一方面展露出此種立場乃奠基於自我與他者之間的相對性，另一方面亦企圖對以往的近代日本漢學研究提出討論與展望，藉此向讀者揭示「跨文化視域」(cross-cultural perspective) 中，東、西雙方彼此的觀察態度及其思考方式。◆

本書のテーマ「近代日本の中国学」が暗示するように、近代以降の日本における知的システムや世界觀の轉換に、伝統の中国学はいかに形作られ、変貌を遂げてきたのか、という問いは二十一世紀の現在において、改めてさまざまな角度から検討されなければならない。というのは、その問いを発するのは、もはや日本人、あるいは單一文化圏の人々に限るべきではないからだ。本書の論文執筆者のほとんどは、外部の他者として、異文化の立場から、自己と他者を相對化する意欲を示しながら、従来の近代日本の中国学研究に異を唱え、さらに現代學術の潮流とも言うべき“cross-cultural perspective”(異文化間の視点、間文化的視点)から生まれ出たものの見方や考え方を提供しようと試みた。◆



伊沢修二と台湾
木下知威 編

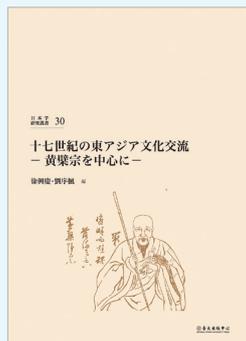
日清講和條約簽署後，臺灣被割讓給日本，當時，日人伊澤修二（いさわ・しゅうじ、1851-1917）為治理臺灣，遂來臺推行日語教育。由於伊澤修二任職於文部省與臺灣總督府，不僅負責教育方面的行政事務、創立國家教育社推行教育啓蒙，也創辦樂石社以推動口吃矯正教育。因此，欲探索近代日本國民語言的奠基事業與成就，伊澤修二是不可避而不談的人物。儘管學界已發表許多有關伊澤修二的先行研究，但目前仍少有同時立足日本、臺灣，乃至亞洲視域的跨文化探討。

本書試圖處理上述課題，並分為兩大部分討論之。第一部分收錄與伊澤修二相關的先行研究，綜合性地檢視伊澤修二在各個領域留下的成就；第二部份收錄五篇不同領域的論文，討論主題包含：口吃矯正、盲啞教育、乃木希典遺髮碑的建立計畫、臺語教育、中文教育，以及伊澤修二逝世後的紀念表揚活動，藉此探究伊澤修二在臺日，甚至東亞語言暨文化交流的進程中，扮演的角色及其意義。◆

日清戦争の講和条約を経て、割讓された台湾を治めるべく降り立った人たちのなかに、一人の男性がいた。その名を伊沢修二（いさわ・しゅうじ、1851-1917）という。伊沢は文部省と台湾総督府に勤務することで教育行政に関わり、または国家教育社で教育の啓蒙をおこない、楽石社をひらいて吃音矯正事業を推し進めた。伊沢は、近代日本における国民の言語の成立を検討するさいに欠かすことのできない人物である。伊沢はその重要性から多くの研究がされてきたが、日本と台湾、ひいてはアジアという視点に立脚した総合的な研究はほとんど行われてこなかった。

本書はこれらの課題に着目し、二部で構成している。第一部では、伊沢の多面にわたる業績についての諸研究を総合的に検討する。第二部では学問領域を超えて伊沢と日本・台湾をめぐる言語と教育の諸課題を明らかにするべく、吃音矯正、盲啞教育、乃木希典遺髮碑の建立計画、台湾語教育、中国語教育、伊沢没後の顕彰活動を主題にした五本の論文で構成している。なお、本書の表紙は伊那市立高遠町歴史博物館所蔵の拓本「伊沢先生記念碑」を使用した。◆

日本學研究叢書 30



十七世紀の東アジア文化交流—黄檗宗を中心に—
徐興慶、劉序楓 編

本書探討 17 世紀以還，德川社會的宗教發展，以及日本政治、社會、經濟乃至語言等各種面向的複雜性，同時對東傳日本的黃檗文化在東亞文化交流的思想體系給予歷史定位。研究課題針對 (1) 近世日本「華僑」社會的形成與變遷；(2) 17 世紀黃檗文化的傳播及其人物、思想交流；(3) 唐通事、中文（唐話）的學習和長崎奉行的相關研究；(4) 黃檗宗的書法、繪畫、雕刻、藝術等日中文化交流研究；(5) 「越境」與獨立性易的思想變遷等，從各領域專家的視角，深化相關的研究成果。◆

本書は、17世紀以降、徳川社会の宗教の発展および政治、社会、経済ないし言語などのあらゆる面の複雑性を検討するとともに、日本で発展した黄檗文化が東アジア文化交流の思想体系において、歴史的に如何に位置づけられるべきかという研究課題を取り上げる。とりわけ、(1)近世日本における「華僑」社会の形成と変遷、(2)17世紀の黄檗文化の伝播および人物、思想交流に関する議論、(3)唐通事、中国語(唐話)の学習、長崎奉行に関する研究、(4)黄檗宗に関する書道、絵画、彫刻、芸術など日中文化交流の研究、(5)独立性易の「越境」による思想変遷の研究、それぞれの分野の専門家の視点から深化した研究成果である。◆

日本學研究叢書一覽 (1-27)

日本學研究叢書一覽 (1-27)		
1	国際日本学研究の基層—台日相互理解の思索と実践に向けて—	徐興慶、太田登 編
2	国際日本学研究の最前線に向けて—流行・ことば・物語の力—	林立萍 編
3	日本近現代文学に内在する他者としての「中国」	范淑文 編
4	日本中世文学における儒積道典籍の受容 —『沙石集』と『徒然草』—	曹景惠 著
5	東アジア龍船競漕の研究—台湾・長崎・沖縄の比較—	黃麗雲 著
6	現代日本語造語の諸相	林慧君 著
7	転換中の EU と「東アジア共同体」—台湾から世界を考える—	徐興慶、陳永峰 編
8	近代東アジアのアボリア	徐興慶 編
9	朱子学と近世・近代の東アジア	井上克人、黃俊傑、陶徳民 編
10	明治日本における台湾像の形成—新聞メディアによる 1874 年「台湾事件」の表象—	陳萱 著
11	日本昔話語彙の研究	林立萍 著
12	非断定的表現「(し) そうだ」に関する語用論的考察	黃鈺涵 著
13	詩に興り礼に立つ—中井竹山における『詩経』学と礼学思想の研究—	田世民 著
14	台湾法における日本的要素	王泰升 著
15	石川啄木詩歌研究への射程	林水福、太田登 編
16	台湾に生まれ育つ台日国際児のバイリンガリズム	服部美貴 著
17	自由・平等・植民地性—台湾における植民地教育制度の形成—	山本和行 著
18	帝国日本の教育総力戦—植民地の「国民学校」制度と初等義務教育政策の研究—	林琪禎 著
19	日本統治期台湾における訳者及び「翻訳」活動—植民地統治と言語文化の錯綜関係—	楊承淑 編
20	東アジア情勢の転換とアベノミクスの影響	蘇顯揚、魏聰哲 編
21	思想史から東アジアを考える	辻本雅史、徐興慶 編
22	東アジアにおけるトランスナショナルな文化の伝播・交流—メディアを中心に—	梁蘊嫻 編
23	福島事故後台日エネルギー政策の変換と原子力協力	謝牧謙、石門環 編
24	鎖国と開国—近世日本の内と外—	辻本雅史、劉序楓 編
25	西川満研究—台湾文学史の視座から—	陳藻香 著
26	漱石と〈時代〉—没後百年に読み拓く—	范淑文 編
27	東アジアにおける知の交流—越境・記憶・共生—	林淑丹、陳明姿 著

* 在日本欲購買本叢書請洽紀伊國屋書店。
本叢書は日本の紀伊國屋書店でお買い求めいただけます。